

大雪縦貫道路問題を振り返る

にしむら・のほる

1935年生まれ。
東北大学農学部卒。
農林水産省農業環境技術研
究所、環境管理部長を経て、
岐阜大学流域環境研究セン
ター長、教授。草地生態学
のほか環境科学などに関心
のほる。環境科学編「日本
の植生」(東海大出版)に
分担当執筆している。

西村 格

先日、俵浩三会長から突然電話で「大雪縦貫道路問題を振り返る」の原稿依頼があり、一九七一年から一九七三年までの大雪縦貫道路建設反対運動の当時を振り返る羽目になった。早いもので、一九七四年に協会の会誌に「大雪縦貫道路建設反対運動の経過と今後の問題点」を書いてからちょうど二十年、私が北海道を離れてやはり二十年を経過している。これを書いた者として、また、この運動がその後の生き方に個人的にも大きく影響した者として、今から見た当時の自然保護の感覚と現状の自然保護や環境保全に対する考え方について若干の感想を、書く責任があるかと考えてお引き受けした。

(1) 大雪縦貫道路建設反対運動の頃

原稿を書く段になり考えてみると、早いもので、既に二十数年を経過していると言う実感がやっと沸いてきた。今でも当時、一緒に運動を展開した仲間の皆さんや指導して下さった先生方の懐かしい顔が目には浮かぶ。坂本直行先生を始めとして札幌の鮫島・原田・平山・滝口・加藤・小川・菲澤・村田・中田などなどの皆さん達、旭川の寺島さんや佐藤さん達、帯広や新得の芳賀先生や藤村・西宗・小林さん達、道庁の俵さんを始め長谷川・百武・渡辺さん達、東京で支援して下さった中村芳男先生や荒垣先生・金田・木原・石・水野・市田・青砥・木内さん達などなど、多くの人の懐かしい顔がはつきりと思い出される。

当時の三年間は、来る週も来る週も北大で会の皆さんと会合を持ち、旭川・帯広・新得など各地域の人達と連絡し、現地調査や現地集会を組織し出かけた。また、札幌ではデモを組織したり、講演会などを開いた。現会長の俵さん達の好意で、

鮫島さんと一緒に小山環境庁長官に列車内で陳情したり、弁護士会の方々の支援で行政不服審査の申し立てをしたりした。横路さんや林さん島本さんなど多くの国会議員の方々に陳情し支援をお願いして回った。当時としては、思いつく有りところあらゆる手段を恥も外聞もなく取ったと言う実感がある。今でも残っている。

当時、私達が会の中で最も注意し苦労した事は、市民運動としての自然保護運動であり、政治的な特定の思想信条の持ち込みを排除する事であった。ややもすると流されて、一部の既成の組織や政党に頼る事が案に運動を展開し継続できる事は承知していた。しかし、なるべく多くの一般の人達に、自然保護の必要性や大雪山の自然の大切さを理解して戴き支持を得る、このことが運動を進める上で重要であるとのコンセンサスが会の中では得られていた。勿論、多くの組織や政党に支持をお願いした。しかし、それらの組織間のバランスには細心の注意は払っていた。これらの点は、現在の自然保護や環境問題への対応をする場合にも共通するものであると考えている。

その頃は、会に参加している私達皆が若く体力も有った。しかし、それ以上に周囲の非常に多くの人達や家族の人達の暖かい支援が有ったから、運動の継続が出来たと思っている。今でも、私などは家内からあの頃は自然保護より家庭保護が必要だったと言われ続けている。

しかし、当時、私達を精力的に指導して下さった坂本直行先生や芳賀先生、全国自然保護連合や日本自然保護協会として中央で支援して下さった中村芳男先生や荒垣秀雄先生達が亡くなられているのを想う時、時の流れを感じずには居られない。

(2) 大雪縦貫道路建設反対運動とは何だったのか
今、この運動とは何だったのかと考えると、全国的には尾瀬・妙高・連峰スカイライン・ピーナスラインなどの、高度成長期の乱開発と言えらる一連の山岳観光道路建設に伴う環境破壊への反対運動の一貫として展開されたわけであった。従って、北海道だけではなく全国の非常に多くの人達に支えられて展開出来た運動であった。その結果として、表面的には「大雪縦貫道路」に関しては、一応の成果を収めて収束出来た例に入れたと言えるのである。

この時の北海道自然保護協会誌に「大雪縦貫道路建設反対運動の経過と今後の問題点」のまとめに、個人的意見として運動を通じて感じた問題点を次の四点ほどにまとめて書き残してある。

それを読み返して見ると、「①行政当局が大雪の自然の価値を認識して計画を取り下げたのではない事、②地方自治体の首長に自然保護や環境保全に対する定見が無く、意見を聞く姿勢がない事、③関係する地域住民に自然保護の重要性を理解させると同時に行政的な生活の安定向上の対策が必要である事、④自然保護運動は単独で成果が無くとも、個々の運動は時代の流れを変える為に必要であり、何時何処の問題でもその成否は別として正しい運動なら、その流れを作ることには貢献している」事などが書いてある。

しかし、考えてみると日本は第二次世界大戦後の五十年は、常に開発が優先され、便利さの追求や金儲けが自然保護や環境の保全より一貫して優先されている。これは今でも変わらない。当時の一九七二年には、すでにローマクラブの「成長の限界」が刊行されていたにも係わらず、この運動

は日本における「成長は常に全て善である」という思考を何ら変化させることは出来なかった。当時を振り返ると、私達は都市の生活者の立場から北海道の豊かな自然の中でその自然の豊かさを守ろうとし、農山村における貴重な自然を残すことがこれらの地域の人の将来のためでもあるとの考えで運動を進めたが、地球環境問題を考える現在から見ると、人間も生態系の構成員として自然が失われることが生存を脅かされると言う主張をする迄には至っていない。この点から見ると私達の主張にも甘さがあり、自然保護や環境保全に対する為政者や市民の意識の改革と言う、本質的な面での成果あげたとは言いがたい。ここでも僅かに時の流れの方向の変化に関与出来たとは言えるかもしれない。

また、当時は自然保護の保護対象は貴重種の保護が主目的のように思われ、扱われていた。マスコミの主張でも、ことさら天然記念物や天然記念物地域の保護に重点が置かれ、自然公園審議会ですらもこの貴重種にしか目が向けられていなかった点に問題があった。大雪縦貫道路建設予定地の周辺は、幸か不幸かナキウサギやウスバキチョウなどを始め多くの貴重な種が存在し、特別保護地区である天然記念物地域にも近かったから、審議会での反対運動の主旨の説明が皆の理解を得やすかったに過ぎない。そのため大雪縦貫道路では、幸運にも建設を阻止できたとも言える。それは南アルプススーパー林道やピーナスラインその他、その後の道路開発の問題に示されていると言える。これらを守るためにも、当然この地域全体の生態系としての環境が維持がなければならないにも係わらずである。

(3) 環境問題への対応の現状

この二十一年間に世界では地球規模の環境保全、例えば気候変動の原因としての熱帯林や寒帯林の破壊や沙漠化などが問題となり、如何にしてそれを防止するか、現状の環境を改善あるいは維持する努力の必要性があるとの認識へと変わりつつある。日本と言う地域あるいは大雪と言う地域の環境が地球環境を構成する環境の一部であり、その地域環境の積み上げが地球環境となる。今は、それぞれの地域、例えば大雪や日高あるいは北海道と言う地域における環境の保全が必要な時期にきている。それが出来て始めて地球環境の保全につながると言える。逆に言えば、日本国内で出来ないことは世界に向けて要求は出来ない。熱帯林や寒帯林の破壊・沙漠化防止あるいはツンドラや湿地からのメタン発生の問題などに、日本でも多くの研究者が関与して保全や保護の研究が進められている。しかし、国内での自然保護や環境保全すらも出来ない国が、それらの問題に口を挟むのはおかしいと言われても仕方がない。しかし、為政者にはこれらの認識は今でも全く無い。公害問題の先進国であるにも係わらず、西欧諸国が公表しているデータすら公表しようとしていない姿勢と共通する。

日本では、中央・地方を問わず為政者や一部の官僚の意識の根底には、常に地域の環境を私物化し開発を優先する考え方が根強く残されている。例えば長良川の河口堰問題や八幡平の松川一網張間の奥山道路の建設あるいは御嶽山リゾート開発の問題など、為政者の認識の無さが日本での自然保護運動の前に大きな障害となって、地域の人達と自然保護や環境保全を考える人との根本的

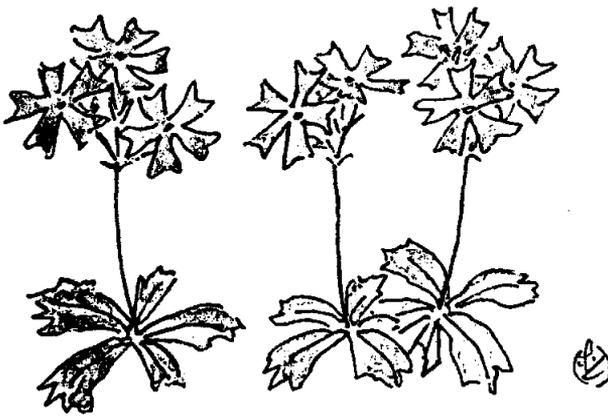
な対立と成ってしまっている現状は昔と変わらな
いと言える。

環境基本法など基本的な部分の考え方には、生
態系の保全が盛り込まれている。しかし、環境保
全のための環境影響調査の項目は、保護対象は貴
重種の保護が主目的のように扱われ、天然記念物
や天然記念物地域の保護に重点を置く考えに止まっ
ている。自然保護や地域の環境保全するためには、
周辺を含めた広範囲の環境の保全が必要であり、
生態系としての保全が必要である。しかし、当時
も今も、その辺の主張はほとんど無視されている。
例えば、私が関与した環境影響評価のマニアル作
成のための委員会ではこれらの考えを入れようと
しても、何時もこれらは評価項目から削除され続
けた事でも示されている。

この二十一年間で世界の自然保護や環境保全の考
え方は、地域の個別の種の保護や特定の地域の保
護の問題から、地域全体の生態系のバランスのや
地球規模の環境を如何に保全するかの問題へと変
化した。これは地域の環境の状態や地域の自然の
状態が悪化の一途をたどって、多くの人の目に問
題点が見え始めたからでもある。しかし、世界的
なレベルの環境問題への関心が高まっているにも
関わらず、日本国内での自然保護や環境問題に対
する関心は低い。これは温帯地域にあり温暖多雨
で気候環境に非常に恵まれた日本の特殊性もある。
だがこれは一般の日本人の開発優先・成長指
向が一向に変化していないためでもある。行政に
かかわる人や政治家、企業家、場合によっては研
究・教育に携わる人も含めた多くの人達の考えは、
残念ながら二十一年たった今でも余り変わってい
ないと言わざるを得ない。

現在、当時に比較して自然保護を含む環境問題
は地球的視野からの問題が捉えられる事が多くなり
つつある。しかし、「大雪縦貫道路建設反対運動
の経過と今後の問題点」の中で、問題点として書
き残した国内の問題は今でもそのまま残されてい
ると言える。

なお、今回の挿し絵は、坂本直行先生の大雪縦
貫道路建設反対運動のパンフレットに使用した挿
し絵の原画と絵はがきです。懐かしく思っ
ただけの方があるかと思いい載せさせていた
だきます。



エゾコザクラ



旭岳